

浜松市博物館館報

— IV —

年報 — 平成2年度 — 1 ~ 22

研究報告 23 ~ 80

今、博物館の利用を考える（講演会記録）

講演、第1部 大堀 哲 23 ~ 37

講演、第2部 馬居 政幸 38 ~ 51

平成3年度 特別展関連講演会要旨（速報） 57 ~ 56
(24) ~ (25)

蒲御厨編年史料（二） 森田 香司 80 ~ 60
(1) ~ (21)

〈資料紹介〉

浜松市高林東遺跡採集土器（考古） 太田 好治 52 ~ 53

新収集の護符（民俗） 齋藤 新 54 ~ 55

南部絵暦（歴史） 小木 香 58 (23)

遠陽市場跡（民俗） 宮下 知良 59 (22)

1992

浜松市博物館

浜松市博物館館報 - IV -
 1992年3月20日
 編集発行：浜松市博物館
 〒432 浜松市蛸塚四丁目22-1
 TEL 053-456-2208(代)
 FAX 053-456-2275
 印刷：中部印刷株式会社

講演、第2部

静岡大学教育学部助教授 馬居 政幸

はじめに

先ほど、大堀先生のお話をうかがいました。そして、科学博物館での活動をビデオで見たわけですが、先生のお話しされたことがまさに実感として理解できたと思います。うかがったことが、実際にどのようなものなのか。イメージのわく人は前からそういうことに気付いている人、逆にイメージのわかかった人はたぶん、やはり物を見る前と後ではわかり方がちがったのではないのでしょうか。要するに博物館の持っている意味、あるいは体験学習とか、学校教育のありかたについて改めて強調されている部分というのは、一種のイメージ、物を学ぶとき、そのリアリティーをどう子供たちが感じることができるか、実感として考えられるかという部分にかかわることだと思うんです。先程の大堀先生の話がまさに実感として感じられたかどうか、という事実がその一例としてあげられます。科学博物館は実際にそういうことをなさっているわけです。単に子供、学校の方を向いているということで開かれた博物館というのではなくて、ビデオに示されるように、どう知らせるか、どう理解していただくか、ということについて、あるいは利用していただくかということについての配慮がものすごく行き届いていると思いました。

ただし、それは理科についてだったので、これからは社会科を中心にして話をしたいと思います。

1. なぜ「生涯学習・開かれた学校の立場から」なのか

(1) 生涯学習社会への移行期に際して

今、一番大事なことは、博物館に限らず、いわゆる教育機関が学ぶ側にたって様々なものを考えているか、プログラムを作っているかどうか。この部分が一番大きな、広い意味での教育機関、学校のみでなく社会教育機関も全部含めての課題ではないかなと思います。ニーズという言葉がここ10年位使われるようになりましたが、それはあらゆるものが「使っていただく」という発想で組替えられるようになったことを象徴する言葉であると思います。以前、「お客さまは神様です」が流行語になりましたが、あえていえば、このような発想が現在の社会を作っている一番ベースにあるのではないかと、ということです。提供する側の論理ではなくて提供される側の論理です。使っていただくという視点がないと、これから様々なことはやってはいけないのではないのでしょうか。逆に、使わせてあげる、教えてあげるという視点が今なお残っているのが学校でしょう。今、そういう仕組みが問われているのではないのでしょうか。たとえばここにお集まりの先生方が、研修を受ける場合を思い浮かべて下さい。研修する側の先生が、される側の先生に教えてあげる。ちゃんと学びなさい、教えてあげるからという姿勢でやっている研修は、官民間わず面白くない。私は夏休みには、いろんな教員研修に参加しますが、



それが生き生きとしているところでは若い先生が沢山います。そこでは、教えて貰うというより、参加者がお互いに持ち寄って教え合い学び合いながら進めています。参加した人が主体なんです。お互いに指摘し合いながら学びあっているというパターンが、たぶんこれからの時代を作っていくのではないかと思います。先程の大堀先生のお話の意図はそういうところにあるのではないかと思います。

(2) 今日の話の要約

まず、今日お話しする内容の骨子を挙げておきます。資料の副題に「生涯学習・開かれた学校の立場から」とありますが、この「開かれた」というのがキーワードです。私自身の研究課題は、開かれた学校というのをどのように進めていくかということです。最初に、それがどういう考え方なのかを述べます。

2番目に、学校では実際のところ一体何ができるか。学習指導要領を生かすことから、今、博物館をどういう場面で利用したらいいか、私なりに、どんな利用の仕方があるかをまとめてみます。

3番目として、では学校教育が文化財、あるいは博物館をなぜ利用しなければならないかという点に言及してみます。これは昭和52年、前回の学習指導要領から出てきている考え方です。それが今回の指導要領改訂でも出ている。そこには一体どういう問題があったか、現実にはどんな形で進んできたか、また進まなかったか、その辺についてをお話します。

4番目に、私自身のテーマとも関連しますが、生涯学習の視点から学校、特に教科の中の社会科と生活科を中心に、具体的に博物館とのかかわりを明らかにしたいと思います。そして、これらのことを通じて地域における学校教育の役割と課題、その意味での生涯学習、あるいは開かれた学校という観点から、博物館のあり方を、私なりに考えてみます。

(3) 石橋レポート（児童の文化施設に対する認知と作用について）解説

はじめに、お手元の資料を見てください。「児童の文化施設に対する認知と作用について」という、日本社会科教育学会第40回大会の発表資料としてまとめられた石橋先生の調査報告があると思います。これは子供たちがどういうふうに博物館とか公民館などの社会教育施設を認知しているかを、教師の側から調査したものです。要するに子供たちが文化施設をどうとらえているかを実証的に調査し、それによって自分の授業を組み直すことを試みた実践レポートです。こうしたものは極めてまれだと思います。この中に社会教育施設を子供たちは何のために利用しているかを調べた結果がでてきます。答えは夏に涼みにくる、あるいはトイレに来ることです。私は「開かれた」という視点は、そういう子供たちをどうやって受け入れるかということが、まずあるのではないかと考えています。お母さんと子供が「あそこはなんだ」と、ふっと入ってきて、そして「あ、面白そうね」となったときに博物館というのは本当に開かれた世界に入っていくのではないのでしょうか。浜松の博物館は、大人から見れば建物そのも

のこのコンセプトは明確なのかもしれませんが果たして子供から見ればどう見えるか。ひょっとしたらレンガのおばけと思うかもしれません。特に夜見たら怖いかもしれません。では、どうすればよいか。

(4) 学校の現状と分析

まず、博物館のあり方や利用の仕方を考える前提として学校教育の現状を分析し、このままいったら学校は子供から捨てられますよ、という話をするところからはじめたいと思います。

なぜ生涯学習などという話がでてきたか。今回の学習指導要領改訂の背景にあるものは何なのか、マスコミを通じて教育の右傾化などと批判されましたが、このようなステレオタイプで判断して、今回の学習指導要領のもつ可能性をみなかったら損だと思います。私は今までにない豊かな可能性を含んだ改訂であったと思います。本当に子供一人一人に、これから生きていく上で何が必要なかを問いつつ授業を作っていく。そういう余地が今回の指導要領にはかなり入っているからです。前回(昭和52年)の指導要領改訂は、それまでの科学技術中心の高度経済成長路線から出てきた問題を何とか克服しようとして、教育の人間化をはかることを目的におこなわれました。しかし、実際には指導要領を少しじつたくらいではどうしようもない部分があり、むしろ先生の仕事は過密になったと思います。これは授業内容が過密になったというより、学校が担わなくてはならない問題がわーっとふくらんだということだと思います。前の時代から学校が当然のこととしてやってきたものが、時代が変わって周りが変化してしまったために学校の役割だけがふくらんだということです。

端的に言いますと、現在の学校制度ができた昭和20年代に学校が担っていた役割は、悪い地域、悪い家庭から何とか子供を学校に登校させて、よく育て、それによってよい社会を作ろうということです。子供の育っている地域、家庭でやっていることはみんな悪いことなんだ。学校がやっていることが正しいことなんだということを前提にして学校はつくられたと思います。よく歯磨きからトイレの訓練まで、学校は何でもやらなくてはいけないのか、といいますが、しかし朝の歯磨きという習慣は学校が子供を通じて家庭に教えたわけです。毎朝顔を洗うという習慣、戦後の新しい日本の社会を作っていく基準みたいなものを、学校は子供たちを通じて家庭に、社会に与えていく。ところが、そういう社会が出来上がった時に、学校はその役割を社会に返すことをしなかったわけです。そういう変わり目をうまく見極められないままずっときてしまった。

義務教育段階では、国民全体を一定の基準まで教え育て、その中から選ばれた子供を高等教育で育てていこうというのが、もともとの仕組みでした。それが、学習年齢をずっと上まで引き伸ばしたものの、教育内容は基本的に変えなかった。むしろ高度にした。その結果、国民の一割とか二割に教えるべき内容を全部の人に教えなきゃならないという仕組みでもってどんどん拡大していった。そのしよせが中学校にきて、校内暴力などという形でもって表れたり、その他いろんな問題が出てきたわけです。

小学校を含めて、前回の指導要領改訂では、単に科学技術、あるいは高度経済成長を可能に

するための知識を与える教育のみではよくないとして、もっと人間性豊かにやりましょうということになった。ところが、それを具体的にどういうふうにするのかというノウハウは必ずしも明確ではなかった。また、それ以前の問題として、実際に子供の育つ場所というのは、この時期に家庭と塾にしかなくなってしまったのではないかと考えられます。昭和20年代の子供は、塾には行かなかったけれど、学校でも家庭でもない、様々な所で学んだはず。学校はそのことを前提にして、それはいい、それはわるい、むしろこっちの事が大事なんですよ、ということをお教えることができた。ところが、いまの子供にあるのは学校と塾と家庭だけ。その間はただの通路です。そうなったときに、どこで生活するための知恵や技能を教わるのか。

よく家庭の教育力が落ちたといえます。実際は落ちていない、というのが私の考えです。そんなものはもともと無かった。歴史を調べてみますと、実際に母親が自分の子供を丁寧に育てるという時代はほとんどありません。意外と思うでしょう。自分たちの親はどうだったか、考えてみてください。昭和20年代以前の日本は農業が中心でした。農家のお母さんは一日中働いていたと思います。朝から晩まで子供のことなんかかまってくれなかったと思います。まして、兄弟が5、6人もあれば、かまいたくともできるわけがありません。

この間、大きなお屋敷に住んでいる年配の方に会いましたが、その方は次男坊で、母親に添い寝された記憶がないと言っています。母親はいるけれども、自分を育ててくれたのは尋常小学校を出た姉やさんだった。姉やさんは7、8歳の子供のそばにいて絵本を読んだり、添い寝して母親代わりをした。では、母親は何をしていたか。家を仕切っていたわけです。大きい家ですから毎日数十人が出入りしていた。奥様としてその人たちのご飯を作ったり、あるいはその姉やさんに母になる教育をするのが役割であったわけです。ではその姉やさんの親はどうであったかということ、働いてばかりで、その子を教えている余裕はないわけです。子供はその辺を走り回って遊んでいるわけです。

多分、皆さんもそっちのほうが多いんじゃないかと思います。少なくとも、四国の農村で育った私はそうでした。親がずっと子供の面倒を見て、しつけもやるというのは、都市のサラリーマンにしかなかったことだと思います。それは産業化された社会の中産階級の文化だからです。それは戦前では10から20パーセントです。ただし、都市のサラリーマンにはお手伝いさんがいました。昭和20年代に作られた建設省の住宅事情調査の項目には「女中部屋」というのがありました。今は、この項目はありませんが、当時は都市ではそういう部屋があることを前提としていたのです。

私が何を言いたいかというと、かつては家族の中に他人がいたわけです。今、家族の中に他人のいる家はほとんどないでしょう。「かわいい子には旅をさせろ」とことわざにあるように、人が生活経験豊かに、なんらかの形で社会的なルールを学ぶ場としては、肉親の間のみでは希薄である。肉親が教えなきゃいけないこともあるけれども、それを身につけさせるのは身近な他人の存在です。今、子供たちに身近な他人の世界があるでしょうか。学校が唯一のものだと思います。

また、日常的に、学校から教えられる知識の背景となるべき経験の世界がほとんど子供になくなっていく。たとえばこういうことがありました。私の息子の国語の教科書に「干潟」につ

いての話が出ていたのですが、息子に「お父さん、ヒガタってなに？」と聞かれました。「教科書に書いてあるから全部読みなさい。」と注意したのですが、全部読んだ後でもやはり分からない。息子はこまったですねえ。海を見たことはなかったわけではないんだけど、知っているのは汚れた海水か、せいぜい海水浴場の人混み。塩の満ち干きする世界なんか知らないわけです。また、やはり教科書にある詩の中に出てくる「バラック」という言葉の意味が分からない、と質問してきた。辞書は一生懸命引きますが、理解できない。バラックなるものを見たことがない。辞書で引いた意味を実感として理解できない。要するに、学校が教える知識の前提にあるはずの生活経験が、今、ほとんどなくなっているわけです。

それは子供だけではなくて、現在、私どもの大学が教育現場に送り出している若い先生にもいえるわけです。昭和40年代、オリンピックのころ以降に生まれ育った人は同じような傾向をもっているはず。日本はその頃に高度経済成長による社会の変化が一般化しました。それ以前の世界では、学校は、子供が遊びながら育つ場である地域や家庭よりも上にいて、学校の外で身につける知識なり経験なりを、もっといいものに変えていくものとして存在しました。このような学校の内と外の関係を端的に示すのが「登校」「下校」という言葉です。学校が、学校の外より高い位置になれば「登る」ことにはならないはず。そして学校で育った人たちが地域を作り替えていくわけです。その結果、子供たちが日常的に様々なことを直接経験できる世界を全部作り替えてしまった。そのため言葉とか、知識の前提にある世界を経験することをほとんどできなくしてしまいました。テレビゲームとかガンダムとかで遊んでいますから、そういう経験は持っていますよ。優しいお父さん、お母さん、それから偏食を許す豊富な食物とか。学校はみんなまんべんなく食べなさい、といいます。貧しい社会ではそれでよかった。ところが、現在では、家庭で出すものをまんべんなく食べていたらみんな成人病になってしまう可能性があるわけです。

学校が持っている勤勉さの「キン」、あるいは禁欲の「キン」、その両方が子供にはむしろある意味で邪魔になっている可能性があるわけです。いっぱいある中から選択しなければならない。選択した以上は自分が責任をとらなければいけない。ところが学校の中には選択するという仕組みはほとんどないと思います。子供の側から選択して学んでいく。そのかわり、学んだ結果は子供が責任をとる、という学び方があるかどうか。今は教師が用意したものを教えて、それを学ばなかったかどうかの責任を子供がとる、という選択肢しかないと思います。

学校の授業は、先生が前もって用意した一定の知識を子供たちに教えるという構造です。教える内容も教え方も全部教師主導型です。教えるものが教師の側にあり、子供たちがそれを絶対学ばなければならない。これは後進国型の構造だと思います。要するに追い付き追い越せ型というか、学ぶものが先にあるので、これを出来るだけ金を掛けずにやる。一人の先生がたくさんの子供に対して一定の知識をどれだけ効率的に与えるかということです。しかし、実際にはそのような構造はすでに破綻しているわけです。なぜ破綻したか。子供の側が変化したからです。教える内容について先生がイメージしていることと教わる子供がイメージしていることが、全然ずれてしまっている。そうなると、子供はどうするか。先生の言っていることを丸

暗記することで対応する。先生が教える知識を生きるための知恵として使うのではなく、先生に気に入られるために覚えていくわけです。このような知識は学校の外へ出たら全部忘れてしまう。

それでも、これまではなんとかやってきたんですが、しかし、それも出来なくなった。何故か。先にのべたように、先生自身に、すでにこうした知識とずれた世界で生活をしてきた人たちが出てきている。また、知識は全部情報に変わっていくというふうには私は思います。これは私なりの考え方なんですが、情報の価値は、それを使う人がきめます。情報自体には価値がない。だから、情報化社会で、重要なのは選択する主体のあり方です。それに対して、知識というのは、そのものが一つの価値を持っている。それを知ることが大事だということです。かつての科学的な知識に対する考え方がその典型です。知識そのものを知ることによって、世界を、人間を変えることができるという考え方です。そして、その知識を与えるのが学校である。だから勤勉でなければならないわけです。しかし、そのような構造がゆらいでいる。学校が与えている知識はほとんど外の世界と遊離している。逆に、情報は学校の外にあふれている。最新の情報ならばテレビを通じて得ることができる。子供は、自分が本当に必要な情報は、学校の中ではなく外で選択する。そのことを暗示しているのが受験情報を売りものにする塾の興隆です。学校はいわば学校の世界の中のみ通用する知識として子供に選択され評価されるしかないような状況が今できつつあるのではないのでしょうか。

(5) 新学習指導要領について（生活科を中心に）

学習指導要領に新しく出てきた「生活科」は、こういった状況を一応認めることから出発し、子供が学校という世界にはいつてくる前の状況をもう一度つくりなおそうとしているのです。それを子供の活動とか体験といってもいいんですが、遊びを通して子供自身が身につけていく世界を用意しようというものだと私は思います。その一番ベースにあるのが「生涯学習体系への移行」というものです。これは一生にわたって学校から学ぶということではありません。教育でなくてあくまでも「学習」なんだというところに少しこだわって考えてみてください。教える側が先にいるのではなくて、学ぶ側が先にいる。学ぶ側の都合によって教える態勢というのはできてきます。教える側はメニューを用意し、学ぶ側はそこから選ぶということです。もちろん、小学校はそんなわけにはいきませんが、要するに小さい頃から自分で学ぶプロセスを学びとっていく。あるいは一方的な教育から、教える側に回ったり、学ぶ側に回ったりというように、人と人との在り方を改めていくということです。

なぜこのようなことが必要なのか、それはこれからの時代は、特定の理念や思想で一方的に導いたり判断したりできないからです。これからどうしなければいけないか。そのつど考えていかなければならない。そうすると、いろんな状況から総合的に判断して選択する必要があります。それが結果的に必ずしもいいかどうか分かりません。悪ければそこでまた修正していかなければなりません。それを繰り返してそれでも少しずつ良い方向に進んでいこう。何がいいのかの基準も揺らいでいる中で進んでいかなければならないのが今の日本であり、子供たちの生き方でもあると思います。

先生方で今、自分が教えていることが子供が成人したときに役に立つかどうかを自信をもって言える人がどれほどいるでしょうか。掛算の九九やひらがな、漢字を覚えるのは大丈夫でしょうが、社会科をやっている先生などは不安だと思います。生活科は、教える内容ではなく、学ぶ体力をつける。学ぶ側の自力をつけていくと考えればいいんじゃないかと思います。そういう意味で、物そのものから学び取る力が必要なのです。人のいとなみや出来事などをきれいに料理したものを教育するのではなく、それらと子供が格闘するなかから何かを学んでいく。こちらが用意した以上のものを学びとっていく。そういう学び方を用意していかないと、結局今の子供はウェハースばかり食べさせられて、いざ堅い料理を食べようと思ったらもう食べられない歯になっていたという状況になってしまうのではないかと思います。

体験学習などを用意すると、用意した事以外の学び方を子供はすると思います。本当に子供たちがのってきますと用意してきたものは全部ふっとびます。けれども明らかに子供たちは何かを学んでいるということは実感としてあると思います。先生はどうしているかということ、子供たちと一緒にさわいでいるんです。全部がそうだったらまずいんですが、そういう状況をどう作っていくかということが、これからの学校教育で考えなければならない大事なことなのです。こういう場面は別に生活科だけではなくて、あらゆる教科の中にも取り入れていかなくてはならないと思います。学校の側で、先生が丁寧に用意すればするほど生徒を縛ってしまう。先生の用意した知識の前提にある経験の世界を出してくることによって、もう一度教わっているものを子供の日常経験のなかに戻してやる。あるいはつなげてやる。そういうことが必要なんではないでしょうか。それが体験とか、経験とか、博物館の場合は実物から学ぶということの意味なのです。教師の側が用意した一定の知識を学ぶための手段としての体験や経験ということに止まらず、さらにその背後にあるもの、つまり物そのものが持っている教育力、意図せざる部分も含めての教育力を、どうやって教師と子供の間（あいだ）につくっていくか。そのために、子供自身の自力をどのように養っていくか。これが、これからの学校教育に求められていることです。さらにより根本的には現代社会において、人が人となるプロセス全体にとって一番大事なことであると考えます。生涯学習社会というのは人が人となるプロセスがトータルに見なおされる社会ということだからです。また、これらのことから、私は生涯学習とは前もって理想的な学習システムがあるのではなく「新たな人の育つシステムの創造への模索」ということではないかと思っています。

(6) 博物館の現状と課題

それでは具体的に、少し博物館のほうを見てみましょう。そういう意味で博物館を見てみると、これも学校と同じようで、やはり問題があるのではないのでしょうか。この浜松の博物館の場合で考えてみたいと思います。そのひとつは、展示の仕方です。入ってすぐの所に骸骨があります。たしかに興味を引くという面では効果があります。しかし、小学生が見たらどう思うのでしょうか。私はやはり骨は死者ですから、もっと丁寧に扱うべきだと思います。葬儀というのは人間の文化の一番象徴的なことです。どういう儀式があるかはその社会の構造を

示すと思います。そして博物館というところは、その社会の構造を示す場所だと思います。こうした視点から言えば、骸骨がさらされているというのはやはりおかしいんじゃないかと思います。骨を見せるのが悪いというより、子供に「埋葬」ということを見せるためにどういう見せ方がいいのか悩んだかということです。

今、小学生がここに来て骨を見る。マンガの中にある骸骨、理科室にある標本と同じ発想でみるとと思います。博物館はそうであってはならない。ここが歴史博物館だということは、これからは歴史学上の知識を教えるだけではなくて、時間の流れの中で人々がどう生きてきたのかを子供なら子供なりに学びとれるような雰囲気にしてほしいわけです。科学博物館が科学することの楽しさをまず子供に経験させるんだという。ここが歴史博物館ならば、それは人が生きてきた歴史の重みみたいなものをおのずと感じとれることが必要なのです。「石斧」がこんなだ、というのは学者の興味です。石斧の構造がどうだ、埋葬の型式がどうだと一生懸命キャプションにより説明したとしても子供は読みません。

この館では学芸員が学校に行って授業に協力したり、「博物館資料利用の手引き」を学校の社会科研究部と一緒に作るとかしているそうで、その意味で、浜松の博物館はすごい教育力を持っていると思います。しかし、一番重要な部分を見逃しているという感じがしてならない。要するに博物館の教育力というのをまだ教える側の発想でしか考えていない。学ぶ側の視点というものをもっと大事にしてほしいということなのです。それには、「様々な学習者のニーズと日常性に根ざした学習ネットワーク中の博物館」というコンセプトが必要なのではないのでしょうか。こちら側に教えるものがあって、子供たちにこれを知りなさい、というのではなく。もちろん、知識や、文化を伝えなければならないということは重要です。けれど、それプラス何か、子供自身が自分が生きるということとからめながらおのずと学びとる雰囲気というもの、あるいはこちらが意図する以上のものをふくらましていくような流れを作らないと、博物館を開かれたものにするという意図は中途半端になるんじゃないかと思います。それは学校教育よりももっと考えなくてはならない。なぜかということ、学校教育は一応、用意されたプログラムに沿って子供たちが学ぶことを前提としているわけです。ところが博物館へはそんなつもりでくるわけではない。それこそ、おしっこがしたいとポンと入ってきた子が展示を見てワァーッとなる。これが素晴らしいのです。

あるいは、もう少し具体的に社会科を中心にして博物館をどう利用するかということから考えてみましょう。先にのべましたように、小学校の低学年では社会科と理科が今後の指導要領改訂でなくなり、「生活科」が生まれました。では、生活科が博物館に関係ないか。大いに関係あると思います。館内の陳列物は1、2年生にむずかしいかもしれませんが、館のまわりの公園の雰囲気はまさに生活科の世界そのものです。近くの学校なら先生は必ず子供を連れてきたいと思うはずで、連れてこなくなったらこの学区に住んでいる子がここで遊んでいたら、もうそのままそが生活科の舞台になるわけです。このまわりで子供があそべるような雰囲気を作れるかどうか。博物館との出会いは学びではなくて、遊びです。学校は学びから入ってきます。こういう施設はやはり、遊びなりちょっとしたきっかけから入ることが大事で、理由

はどうであれ、とにかくフリーな時にバツと子供心、子供の好奇心をつかむことが大事です。ちょっとでも興味を持つような、あるいは触れてみたいと思うような雰囲気をまず、館そのものや周囲に作っていかどうかを最初に考えなきゃいけないと思います。博物館がいままでやってきた事業を生かすためにもまわりの雰囲気から始めていくことが大事でしょう。

次に、展示の内容ですが、これはやはりむずかしいですね。あるいは学者の発想といった方が正確かもしれませんが。これだけのことがあるんだと説明するという発想だと思うんです。展示を見ながらおのずと科学することを学んでいく、興味をかきたてていくような流れになっていなくて、やはり考古学に興味のある人や何らかの学習課題をもつ人が勉強するために作ってあります。中学生なら読めるだろうという前提で説明を書いてあるということ、たしかに読むことはできるかもしれませんが、意味をとることができるでしょうか。キャプションの置き方、説明の仕方、展示の仕方を、小学生が読むのではなく見るだけで意味があるようになっていこうかという視点から、もっと工夫しなければならないだろうと思います。ただし、小学生の目から見たとき、ここの展示がどんな問題をもっているのかは学芸員にはわからないはず。学芸員は本来、研究することが目的。あるいは発掘して、少しでも過去を掘り出して意味付けしたり、新しいものを作っていくことが仕事だからです。しかし、時代が大きく動いている今、博物館は研究や展示活動だけでなく、一種の教育機能を發揮していかなければならないでしょう。ではその時どうすればいいのかというと、これはやはり学校の先生方の役割でしょう。博物館側と先生と一緒に作っていくというコンセプト、仕組みがあるかどうかという問題です。またその仕組みを作ったからといって先生がすぐのってくるかという問題もあります。同時に先生が本当に小学生の目線で展示を見られるかということにも問題があると思います。

先程、国立科学博物館で作ったビデオを見ましたが、素晴らしいものです。それも中身の素晴らしいだけでなく、表現の仕方自体の素晴らしいが私には思いません。分かりやすく、興味をもつように。今まではどうしても中身中心になって、中身さえよければ表現の仕方は二次的なものだと考えられる傾向が強かったと思います。それに対して、どう表現するかにむしろ価値を置く。これは第三次産業中心社会の宿命みたいなものです。表現そのものが、ひとつの高度な創造の世界なんだと考えていただければいいんじゃないかと思えます。実際にいわゆるカタカナ業界のクリエイターと言われている人たちはみんな表現の世界に生きています。今、若い人が一番あこがれる世界です。私もよくそういう人と仕事をします。軽薄症の代表みたいに言われますが、実際そうではありません。ものすごい苦勞をしています。ものを産み出すために、たった一行のコピーをひねり出すために何日も必死になって考えている。一億円の仕事をすればその宣伝費は一般に一割の一千万円。一つのコピー、マークに何百万円と掛けるわけですから、当然です。そして、本当は、先生方の仕事はそういう世界に近いはず。そのわりには給料安いと思えますが……。ですから、子供たちに対してどう表現するか、あるいは子供たちがどう受け取ってくれるかということから、この博物館の中を創造していかなければならないということです。展示にはクリエイターと言われている人たち、コピーライターとか

展示専門の人、物を作る人も必要でしょう。そして物そのものをよく知っている学芸員、子供の視点を知っている先生方も必要です。そういう人たちが一緒になって、コンセプトを出していく。小学生にあわせる、中学生にあわせる、いろいろあります。

2. 新学習指導要領（社会科）における博物館の位置付け

(1) 小学校について

博物館の利用ということで、先程あげたように小学校一、二年生の生活科にとっての利用がありますが、さらに小・中・高校の社会科ということでは一貫したカリキュラムを組むことが出来ます。一、二年生は博物館の外、周囲を利用する。三年生になると地域学習が入ってきます。「わが町はまつ」みたいな形で、町全体の移り変りの様子、そこでどういう人たちが生活してきたのか、などという学習になると思います。市内の小学校ならば浜松市全体が学習の対象になるはず。一、二年生では学校と家庭とその間（あいだ）の世界、もしくは子供が普段遊んでいる場である学区全体が対象になる。

それが三年生になると広がって、行政区としての浜松市、浜松市そのものの移り変り、それを人の営みとしてどう表現できるかです。ここには何でも出てきます。この学年では、大体ここ百年間くらいの時間の流れの中での変化を扱うわけ。そういう意味での浜松の変化というのを、どうやって子供が実感できるのか。これはパノラマで示すということもあるでしょう。一つの実物で示すこともあると思います。また、博物館の中でできなければ、教室でそれを表現するときに、もっとも典型的なものはこれだということ博物館側が資料を用意しておくこともあるでしょう。

しかし、博物館でなにかも描えることは不可能なわけ。そこで、たとえばここがキーステーションになって、社会科なら社会科の教材は県内、西部地区、市内のどこにあるということの情報ネットワークを組むことができると思います。浜松科学館では学校とコンピューターをつなごうとしていますし、浜松の土地柄としてそういうことはどんどん取り入れますから、いろんな形でネットワークを組むことはそう唐突な話ではないと思います。情報ネットワークとしてどういうふうに組んでいくかは、先生だけの仕事ではなくて、博物館とのプロジェクトを組むことによって進めなければならない仕事だと思います。

先生との協力の上で、小学校三年生の場合は今言ったように市の移り変り、たとえば浜松まつり、凧揚げがいつ出来てどのように変わってきたか、もともとはどうだったか、といった意味付けをすることが必要です。社会科から見れば、まつりはそれだけがほんと最初からあるわけではないからです。

博物館の場合でいえば、ここにあるものはたとえ石であっても、それが石斧となったときにそこに人の営みが入ってくるわけ。石斧が存在するのはそこに人が生きていた証拠であり、生活があり、行動があったということが背景にワットとあるわけ。そういうものが見えてくるような世界を子供たちに味わわせてあげたい。たった一つの石斧からそういう世界が見えてくるというのは学校の教科書では絶対に扱えない。物そのものが語り掛けてくる世界です。

したがって、まつりにしても、まつりそのものの変化も大事なんです、それより今子供に必要なのは、そういうものを産み出してきた人たちの生活とか、人と人とのつながり、あるいはそれに向けての人々の思いがくみとれる展示が必要であって、その部分が見えてこない、せっかくのパノラマでも「あっ、プラモデルが並んでる！」になるわけです。そうするとやはり本来の意図ははたせないと思います。やはり、このような歴史の博物館というのは、そこにいた人たちの営みが見えてこないといけないと思います。

つぎに、四年生については、これはもう目一杯役に立ちますね。三年生ではここ百年のことですが、四年では地域の開発に尽くした人というところが出てきます。そういう場合に、浜松を作った人の営みみたいな部分がどこかでみえてくるかどうかが問題です。別に天竜川治水に功績のあった金原明善のような特別な人でなくてもよいのです。鋏とか農具、千歯こきでも、そういうものから、それを使った人たちの生活がみえてくれば、そこにこれらのものを生み出し、そこで生きてきた人たちがこの浜松を作ったんだということが見えてくる。そのような様々な道具や生活用品が、その物が持っている技術と、その技術を生かして生活している人との関係が体系だっで見えてくれば、十分に郷土を作った人の学習ということになるのではないかと思います。

次に、五年生では産業学習、直接的には伝統的な技術を生かした工業というのが、おそらく博物館と係わりがでてくると思います。何度も言っているように、伝統的な産業の学習でも、単にお国めぐりのどこにどういうものがある、というのではなくて、そこでどういう人たちが生活し、それが今子供たちにどういう意味をもっているのかを考えさせることが重要です。浜松には繊維産業とか楽器、オートバイ、自動車とかハイテク産業、いろんなものがあると思いますが、要するに五年生の子が地域の産業を学ぶ上で、どういうものが必要なのか。単に物としてだけでなくその背後にある人、そして出来事がセットになるような見方。それは実物がどのように展示されているかによってかなりカバーできる部分があると思います。

六年生になると歴史学習が始まりますが、これも同じです。参考として、私が大学で塩田の教材を作ったことを挙げましょう。学生を教える中で、昔、由比に塩田があった。学生たちが頑張って地元のおじいさんにどういふふうにするのか聞きまして、その当時の服装に可能なかぎり着替えて、由比の浜で小さな塩田を作って、昔の人はどうやって塩を作っていたのかをビデオに収めたわけです。学生たちも一生懸命調査しまして、たぶん子供たちは興味をもてるんじゃないかと思います。

こういった、いわば伝統産業の興りなどはどんどん分からなくなってきている部分ですから、何らかの形で記録しなければならない。博物館が全部やる必要はないと思います。どういう人に聞けばいいのか、どこへ行けばわかるのか、あるいはそれらをビデオにまとめて置いておく、といった形の情報ネットワーク、先程も話しましたが、それがあってもいいのではないのでしょうか。

日本は、学習指導要領があることで比較的均一な授業が行われます。その利点を使って、代表的な教材をどこまでサポートできるかというところでストックしていけば、物そのものを教材として貸し出ししたり、ビデオとしてとっておくこともできるわけです。ひとつの学校に置いて

ておくだけでは、なかなか他の学校が利用するというのはできないと思います。博物館がいわば社会科の教材の宝庫になっていく、あるいは情報ネットワークのセンターになる。教育委員会の他の部署が用意するところもあるでしょうが、博物館のようなところは、先生方が館の中の部屋を使って、週に一度とか集まって、サークルを作って、そこで出来た資料をこちらにストックしておく。利用するのは一定の簡単な手続きで、だれもが利用できる。そういうシステムを考えてもいいのではないのでしょうか。そうすることによって、博物館が本来もっているノウハウ、そこにストックされている知識も生かされるし、それを契機にしてこの博物館自体が従来担ってきた以上に機能を広げていくこともできるわけです。いわゆるその場自体が新しい教育力の震源地みたいになっていく。博物館という建物はそういう力を持っていると私は思います。博物館そのものが本来持っていた力以上のものを発揮する。そういう場になれるかどうかのポイントは、教師が自由に利用できるような空間を保証することができるかどうか、ではないかと思っています。

小学校の各学年について私が言ったことは全部、指導要領に沿っているわけです。各学年で博物館を利用しなさいということは明確に書いてあります。

(2) 中学校について

それから、中学校の場合どうなのか。指導要領ではひとつには人物学習、要するに歴史上の人物が果たした役割、生き方と時代背景を関連づけて考察させる、とあります。歴史上の事実を知識として教えていくだけでは、子供たちには定着しない。その背後にある人そのものの営み、なりわいというものを子供が理解できるかどうか。研究者のための学習ではなくて、子供自身がこれから生きていく上で必要な歴史学習ならば、その部分が見えないといけない。

先程の大堀先生のお話ではアメリカの場合、非常に子供の生活と密着した形で考えているし、教科書そのものがそうなっているようです。日本の教科書は、教える内容を多くして、内容の説明を少なくしています。ですから、知識の量は多いようにみえますが、実は多いのは単語なんです。単語の背景にある中身はほとんどないわけです。例えば社会科でアメリカのことを学んだとします。アメリカに関する知識は教科書の中にたくさん入っています。しかし、アメリカに行って生活するうえでほとんど役に立たない知識ばかりです。どういうふうに住生活するのかということに教科書はまったく触れていない。これが日本の教科書の特徴。それを私はいわゆる後進国型の教科書、いかに言えば先進国にキャッチアップするために必要な知識をできるだけ詰め込んだ教科書の典型だと思います。

学ぶべき内容を出来るだけ集約して伝えていく。最初に言いましたように、もうこれからはそういう生き方は無理なんだろうと思います。これからは、かつてのヨーロッパ、戦後のアメリカや、ソビエトが担ってきた世界のリーダー役、新しいものを出していかなければならない側に日本は回らざるをえない。いばって言うわけではなくて、また、中にいる人間のほとんどが世界でトップの経済力を持っているなんて実感ももっていかなくとも、外から見れば日本はそう思われているわけです。とすれば、何らかの形で責任を取っていかなくてはならない。トッ

ブを走る人は自分で考えていかなければならない。答えは自分で出さなければならぬ。出したらみんなからたたかれるけれどもやらなければならぬ。これはアメリカもソビエト、ヨーロッパも今までやってきたことなんです。それが良かったか、悪かったかは別として、日本も金をもうけたんだからちゃんと世界のためにやんなさいというのが、たぶん日本以外の人達の考えだと思います。好むと好まざるとにかかわらずそういうことに応えられるような、子供の育て方をせざるをえないと思います。もちろん、外国に言われたからでなく、それぞれが自分の考えを持つことができるようにすることこそ、本来の教育のあり方であるということ踏まえてのことです。

その意味で、先生方も、自分で考えるということが指導要領の主旨だと思います。自分たちの教育をやるせつかくのチャンスが来たわけです。若い先生は今、元気です。特に、生活科に関わっている現役の先生には何をやっていいという雰囲気があります。事実、子供たちと一緒に元気で明るく楽しくやろうということで、実際にそうなっています。今、学校ではいろんな冒険ができると思います。とにかく言い方さえ間違わなければ、何を試みても大丈夫だというのが、指導要領改訂以後の学校現場を見てきた私の実感です。

少し話がそれました。中学校にもどします。中学校のもうひとつの課題は文化財学習です。

3. 文化財学習のネットワークとしての学校と博物館

(1) 文化財学習の背景

前回の指導要領での文化財学習の背景はこういうことだったと思います。教育の人間化ということで、人間にとって大事なものは文化なんだ。文化を理解するということは、歴史にあてはめれば、単なる政治の歴史ではなくて、生活文化の歴史なんだ、ということです。それで文化財の学習が「異文化の理解」という視点でできたんだと思います。

今回の指導要領改訂では、それがさらに徹底される。それと同時に、前回初めて民俗学が中学校社会科の歴史的分野に取り入れられたけれども、そうした民俗学、考古学、歴史学を含めてその研究成果と子供が学ぶこととの間に少し距離がありすぎる。その間をどうやって埋めるか。新たに学問を取り入れればなんとかなると思われたのが、そんな甘いものではなかった。見せること、それ自体を考えなければならなくなった。それが、学問の研究成果と子供の学習の間への配慮という課題の意味です。

教科指導があって、その目的にあった材料をポン、ポンと入れていくやりかただけでは、多分子供は興味をもたないだろう。もっと物そのものから学習を生み出していく。古代の骨からいったい何が学べるか。古代を、あるいは古代の埋葬を知るために展示されている骨を導入として使うのではなくて、この骨自体からいったいどういう学習が可能なのか、この石からどういう学習が可能なのか、そういう視点で展示していったほうがいい。これを「教材優先型」というんです。このためには、学校側からはこういうものを学びたいのをお願いします、博物館からはこういうものがありますがどうですか、ということでコミュニケーションが必要です。コミュニケーションするなかで、お互いのいいところを生かし合いながら作っていかなければ

ならないでしょう。学校側からも博物館の側からもそういう仕組みをどうやって作っていくかがやはり課題になると思います。

4. 学校と博物館の学習ネットワーク化における課題

最後に、学校の博物館の学習ネットワーク化における課題ということで、博物館への課題をあげます。そのひとつは学習者のニーズと視線に応じて人・物・事の展示を工夫できるか、ということです。子供がどういうことを知りたがっているか、それに合わせてどういうふうに展示を作っているか、あるいは子供たちがスッと入っていただけるか。これが子供の視線の意味です。子供はたぶん物だけしか見えないと思います。物を展示する際に、その物の背後にある人、その人がおこなってきた出来事を、トータルにとらえてもらうには、どうすれば良いかということを考えてほしいと思います。

だけれども、しょせんはたいしたことはない。一博物館がやることは大したことはないんですよ。予算もスペースも限りがあります。とするならば、いくつかの機関を結ぶしかないでしょう。自分たちができることはここまでなんだ。だからいろんな人の助けを得るんだということです。ネットワークが必要なわけです。これが二つ目の課題です。

そして三つ目はネットワークの中身。情報の問題です。これは先に述べましたように使う側の主体性という意味も含めての情報というふうに考えたいと思います。こちら側が用意したものをその意図のとおりに使ってくれ、というのではなくて、こちら側はこういうつもりで用意したが、それに意味付けをしてくれるのはそちら側なんだということ。あるいは、それに応じてまた、こちら側も作り替えましょうという、ツーウェイですね。

そして四つ目。学校と博物館だけでなく、始めのほうで言いました、ひょっと立ち寄った子供をヘーッと思わせるような、また地域の人たちにどういうふうに関いた構造にできるかが、これから博物館が最も悩んでいかなければならない課題だと思います。

なお、先生方に対しては、子供とともに学ぶ教師になっていただきたいということがあります。大堀先生のお話に、見学に来ると先生はタバコすって子供の様子を見ているだけ、とありました。これではやはりさみしい。私は、先生がいつも先生である必要はないと思っています。子供と一緒に勉強していいんだ、子供と同じ位置に立って勉強して下さい、ということなんです。学ぶ側にまわって子供と一緒に学ぶ、子供と先生との学び方の違いを子供に見せてあげてください。同じ事を一緒に聞いても、先生はやはり違うんだぞというふうにやってくれればと思います。先程の骨の話じゃないですが、この骨から何が見えてくるか、子供たちと一緒に教材を作っていく。そして、先程からのべてきましたように、博物館と学校がそれぞれもっている教育力、それを合わせながら情報を共有化していく。ストックしていく。それが実際に授業に活かされたときにどんなものになるか。その結果をさらに情報としてストックして、ネットワーク化して広がっていただけるような、そしていつでもだれでもが利用できるような、そうしたものの核に博物館がなっていくことを期待して私の話を終わらせていただきます。

(文責、浜松市博物館)